



結成 20 周年を迎える、小曾根真率いる 最強ビック・バンド『No Name Horses』その魅力とは？

『No Name Horses』のリーダーとして 4 年ぶりにポポロに
ご出演の、小曾根真さんにインタビューを行いました。

**Q1 | ポポロでは 2021 年「小曾根真 60th Birthday Solo OZONE 60
Classic×Jazz」で演奏していただきました。今回は、ビックバンド『No Name
Horses』のライブになります。どのようなきっかけで結成されたのでしょうか？**

歌手の伊藤君子さんのレコーディングのために集まったのがきっかけになりました。
トップメンバーを集めてレコーディングしたら、余りにも音が素晴らしいと、このメンバーでライ
ブをやりたい！と盛り上がって、伊藤さんの CD 発売記念ツアーをやったのが始まりでした。

ツアー中に、誰からともなく「やっぱりこのバンドの音は残しておいた方がいいよね」という
声が上がって、バンドだけで 1 枚作って、それが気が付いたら 20 年が経ちました。瓢箪から
駒もいいところですよね。

ジャズミュージシャンなので、楽譜があるにも関わらず、気が付いたら楽譜と違うところで、
どんどん演奏が始まつて広がっていくのです。だいたい、僕が仕掛けて、それをみんなが楽し
んでくれています。僕が逆に「譜面にはこう書いてんだけど、みんなはどういうふうに吹く？」
って問い合わせたりもします。全てのメンバーそれぞれが積極的に関わって、音楽と一緒に創つ
ています。これだけ素晴らしいメンバーが集まると、曲が鳴った瞬間に、ここはどういうふうに
吹いたらいいか、みんながわかるんですよね。たった数回のリハでこんなに音楽ができちゃう
んだったら、ツアーやったら大変なことになるぞって思っていました。ニューヨーク、ヨーロッパ
でも演奏するチャンスを頂けたり、結果こんなに長く一緒に活動を続けるに至りました。

僕が、バークリー時代に尊敬していた先生から言われた番大事なことは、
「ミュージシャンを触発する譜面を書け」ということでした。

芝居だったら、役者が読んでワクワクするような台本を、そういう脚本を書けっていうこと
です。きちんと行間が書けている脚本を書けば、そこに良い役者が来れば、細かい演出までつ
けなくても芝居が成立して行くんですよ。僕もそれを目指しています。答えはないけど、自分が
お客様だったら、ここはこういうふうに感じたいなってことを書いていくと、良いミュージシ
ヤンはちゃんと三次元に立ちあげてくれるんです。

「僕はこんなことが出来ます、こんな事もかけます」が前に立つ譜面だと、彼らは完璧な演奏
だけして、さっさと帰つて行くと思います。





→譜面以上の事は無いよねってことですね。

それが別に悪いことじゃないんですけど、ジャズとなると、みんなで創っていくビジョンがないと楽しくないですし、「No Name Horses」は全員がアンサンブルの譜面どおり吹いているにもかかわらず、全員が「俺ならここはこう吹く」という思いを込めて、同時に音が鳴るので、音楽が深く、分厚くなるんです。

→すごいですね。

本当に凄いです！でもこれが人間だからできる技なんですよ。聴くだけじゃなく、音楽から何を感じているかがあるから、「ここ、こうだよねって」みんなが会話するんです。そうするとそこに、やっぱりたまらない何かグッとくるエネルギーが来るんですよ。この点に関しては、僕はこのバンドに絶対的な信頼と自信を持っています。お客様はそのグッとくるエネルギーを感じるから楽しみに来てくださるのではないか。このバンドのツアーを待ち望んでいてくださる方が沢山いてくださって。とても有難いことです！

Q2 | 『No Name Horses』(NNH)とてもかっこいいバンド名ですが、由来は？

僕の相棒の神野三鈴が名付け親です。由来は、東京のファーストコール=馬でいうとサラブレッドが集まっているバンドメンバーであること。サラブレッドっていうのは、だいたい飼い主がいるでしょう？そしたら当然名前…ありますね。うちは所有者がいないし、自由に駆け回るんです。自由に駆け回るサラブレッドたち、だけど名前がなく、飼い主がいないから「No Name Horses」。でも実際は、みんなそれでお家に素敵な馬主さんがいらっしゃるんです（笑）。

※以降「No Name Horses」は「NNH」と表記いたします。

★ | 小曾根さんが『ビックバンド』の編成で演奏した、初めての舞台は？

小学校5年生の時で、父親(小曾根実)のステージでした。シンガーの小坂明子さんのお父さん、小坂務さんのバンド「ニューソニックジャズオーケストラ」といつしょにジャズの曲を演奏させていただいて、あれはもうたまらない至福の時間でしたね。

★ | 子供の時にビックバンドと演奏したことは、影響がありましたか？

影響を受けていると思います。ピアニストなので、ソロでコンサートはできますが、オーケストラやビックバンドでみんなで一緒に演奏するのも大好きで、ワクワクします。一緒に音楽を創る幸せを共有して、演奏することは最高の贅沢なんです。





Q3 | 『NNH』の活動を振り返って、思い出深い公演や、演奏曲はありますか？

バンドを結成してすぐに、ニューヨークのジャズコンベンションに呼ばれて演奏させていただいた時に、ニューヨークのお客さんにスタンディングオベーションをもらったこと。あとはフランスの「ラ・ロック・ダンテロン」というクラシックの音楽祭なんんですけど、ジャズの日を作っていました。その時は 2000 人のフランス人のお客様が総立ちでアンコールが止まらなかつたのも感激でした。その後、NNH のサウンドや、意識が変わりましたね。海外公演で現地のお客さんがあんなに熱狂するっていうのを見ることが、日本人であるミュージシャンには凄く励みになりましたし、大きな自信にも繋がったんだと思います。そこからモチベーションもさらに上がりましたし、それはもう忘れられない体験でしたね。

Q4 | メンバーみなさまが第一線で活躍するトップミュージシャンでいらっしゃいますが、活動していく中で、ぶつかることはありましたか？また活動の中で、得たことはありましたか？

音楽的に揉めた事はまずないです。個人的なことは色々とあったと思いますけど、それぞれが乗り切ってきたと思います。音楽ってその人を裸にしていくんです。真剣にやればやるほど、自分が持っている課題も見つかりたりして。それをみんなで支え合って乗り越えて、今ここにいる気がします。僕の相棒の三鈴がずっと支えてくれてきましたが、バンドのメンバーそれぞれの家族がずっと後ろで支えてくれた事でここまで来れたのだと思います。仮にバンド活動で揉めることがあるとすれば、音出す前に設計図の段階じゃないでしょうか。それは音楽の問題ではなくて、自分の言った提案が通らなかったとか、些細なことですよね。これは僕のやり方ですけど、やってみて決める事にしています。両方のやり方でやってみようって音を出す、良いミュージシャンたちは音を聞けばすぐにわかります。

Q5 | 結成 20 周年を迎え、3 名の新たなメンバー(松井さん、陸さん、小川さん)を迎えてのツアーになりますね。変化はありましたか？

バンドが 20 年若返りましたね。若い 3 人が入ってきたことで、長年やっているメンバーが凄く刺激をもらっています。僕も含めてみんな、本当に良いケミストリーが生まれましたね。今回のアルバムは、今までのアルバムの中で 1 番元気なんじゃないかっていうくらい、勢いのあるアルバムができました。





Q6 | 今回制作された、結成 20 周年記念アルバム「Day 1」のタイトルは、どんな意味をこめてつけられたのですか？

20 年間いろんな音楽をやってきて、基本的にジャズバンドですけど、前回はプログレのロックを、その前はクラシックみたいな、僕の書いた『ビック・バンド交響詩』をやったりもしましたけど、「僕たちやっぱジャズのバンドだよ、もう一回そこに戻ろう！」ということで『Day 1』。俺たちはラージアンサンブル、ジャズオーケストラじゃない、「俺たちはビックバンドなんだ！ ジャズなんだよ」っていうのが今回の大きなメッセージです。

Q7 | ツアーの副題に「僕たちがビックバンドで本当にやりたかったこと」とありますが、それは具体的にどういったことでしょうか？

一言でいうと自由に演奏するということです。いったん音が始まると、その日に音楽が行きたい方向っていうのがあるんですよ。それは「頭で考えて、ここをこう弾きましょう」っていうそんな細かいことではないんです。ジャズの即興演奏というのは、今自分が表現したいんだって思うものが出てくるんです。うちのバンドっていうのは、それを一緒に旅していくっていうのかな、誰も指揮しないし、誰もキュー振らないのに音が合ったり、逆に毎晩自由に何かが起るんですよ。あと、僕が絶対に伝えたいのはスイング。このリズムについて、僕の黒人の友達といつも話をするんですけど、「スイングのリズムは、もともとダンスマュージックだったっていうのを絶対忘れんなよ」っていうのが、僕らの年代にはあるんです。ワクワクするスイングのリズムっていうのは、絶対に体が勝手に動きますよね。これがダンスマュージックなんです。「Day 1」みたいな複雑に聴こえる曲も、聴いていてワクワクするスイングのリズムを感じれば、絶対に体が勝手に動く。そこに僕はすごいこだわりを持っています。聴いてもらったらわかると思うんですけど、俺たちがやりたかったことの1つは、とにかくスイングすること。

そして、心にグッとくる「ブルース」ですね。ブルースっていうのは日本でいうと“なにわ節”かな。「今日つらいけど、あしたも頑張るか」みたいな、酒一杯ひっかけながら歌う曲とか、生きている人間だからこそわかる何かですね、それが音楽の中にあることが、ジャズである第一条件のように思っていて、そこからどんどん発展してきていると思います。僕らは「Don ‘t forget this is Jazz」「Don ‘t forget Jazz used to be dance music」というメッセージを演奏を通じて伝えたいですね。

Q8 | 最後にお越しくださるお客様にメッセージを！

「ジャズってわからないんです」っておっしゃる方も多いんですけど、僕らはとにかくこの日、その瞬間に生まれてくる音楽を、この場所でしか体験できない一期一会の音楽をぜひ一緒に楽しんでいただきたいと思います！

